



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

二極分化する若者たちの対人コミュニケーション：
「距離をおく若者たち」と「距離をおかない若者たち」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 洞澤, 伸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/4605

二極分化する若者たちの対人コミュニケーション

— 「距離をおく若者たち」と「距離をおかない若者たち」 —

洞澤 伸

(2005年11月28日受理)

Bipolarization of Communication Among Young People

— Young People Who Keep Distance and Young People Who Don't —

Shin HORASAWA

1. 問題提起

本稿の目的は、現代の若者たちの対人コミュニケーションにおける二極分化について論考することである。

近年、若者たちの対人コミュニケーションが大きく二極分化してきているということがよく言われる。次の(1)は、内閣府が設置した「若者の包括的な自立支援方策に関する検討会」(平成16年9月～平成17年6月)の議論の中で出された一つの見解である。なお、下線は筆者による加筆である。

- (1) 「最近の中高生は、対人評価の軸が非常に単純化しており、おもしろくてコミュニケーション能力が高いかどうか、という軸しかない。このような傾向は中学生くらいから始まり、これによって、社交的な人とそうでない人が、思春期以降、二極分化してしまっている。コミュニケーションの輪から外れることへの過剰な恐怖が高い敷居となってしまっている。」

(第3回検討会<平成16年10月19日>議事録要旨より)

この(1)の指摘は、社交的な者を一方の極、そうではない者を他方の極として、若者たちの対人コミュニケーションが二極分化してきていることを危惧するものである。少子高齢化、核家族化、情報化・IT化などの進行は、価値観の多様化をもたらすとともに、現代日本の青少年を取り巻く社会的環境を大きく変化させている。そうした中で、現在、若者たちにおいては「社会的自立の遅れ」という問題が発生している。上記の検討会は、そのことに対処するために設置されたものである。この検討会では、若者たちの自立支援を国・社会の重要課題として位置付けて、その方策についての議論が行われた。しかし、そこにおいては若者たちの就業問題が主たるテーマであった。そのために、若者たちの対人コミュニケーションにおける二極分化についての議論は限定的なものとなっている。

本稿では、次の(イ)(ロ)の2つの問題を提起して、若者たちの対人コミュニケーションの在り方について考察する。

- (イ) 若者たちの対人コミュニケーションにおける二極分化とはどのようなものであるのか。
- (ロ) その二極分化において、一般的な若者たちの言語行動は、どのように位置づけることができるのか。

問題(イ)についての考察では、他の研究者が考える若者たちの二極分化についての見解を紹介したあと、筆者の私見を述べることにする。その際、他者に対する心的距離という観点から考察を行う。問題(ロ)の考察においては、通常の一般的な若者たちの言語行動を二極分化してきている若者たちの心的距離のスケール(物差し)の中で、どのように位置づけることができるのかについて明らかにする。その際、若者たちの具体的な言語行動を例として取り上げる。若者たちの対人コミュニケーションを他者に対する心的距離のスケールを用いて具体的に考察した研究はまだない。

2. 若者たちの対人コミュニケーションの二極分化

若者たちの二極分化については、たとえば、斎藤(2001)(2003b)、正高(2003)などの指摘がある。以下では、前者を「若者たちの二極分化A」(斎藤)、後者を「若者たちの二極分化B」(正高)と呼ぶことにする。次に、この両者について概説する。そのあとで、「若者たちの二極分化C」(洞澤)として筆者の私見を述べる。また、これらABCの三者の比較も行う。

2.1. 「若者たちの二極分化A」(斎藤)

斎藤(2001)(2003b:16-19)では、現代の若者たちは次の表(2)に示すように「ひきこもり系」と「じぶん探し系」を両極として、二極分化が起きていると述べている。なお、そこでは、それぞれに関係する精神障害についても言及されているが、それは本稿とは直接関係するものではないため省略することにする。

(2) 「ひきこもり系」と「じぶん探し系」

(斎藤2003b:18)

【ひきこもり系】		【じぶん探し系】
低い	[コミュニケーション能力]	高い
少ない	[友人の数]	多い
安定	[自己イメージ]	不安定
自分自身との関係	[自信のよりどころ]	仲間との関係
インターネット	[親和性の高いメディア]	携帯電話
高い	[一人で居られる能力]	低い

(※関係する精神障害については省略してある)

「ひきこもり系」とは、若者たちにおける非社会的な傾向全般を指す総称である。つまり、そこには自宅の自室にひきこもる若者から、社会参加はしてはいるものの、他人と交わることよりは自分の世界を追求することを好む若者まで、幅広く含まれている。このような若者は、一般にコミュニケーションが苦手な淡泊ではあるが、比較的安定した自己イメージを持っているという。他方、「じぶん探し系」とは、コミュニケーションが巧みで友人が多く、行動的で活発な若者たちを

指す。このような若者は、コミュニケーションが得意で誰とでも親しくなることができ友人の数も非常に多い。しかし、対人関係から離れると自己イメージが不安定になる傾向がある。ただし、これらは必ずしも性格分類のような静的な分類ではなく、同一人物において両者が共存したり、相互に移行することもあるという。この「若者たちの二極分化A」(斎藤)における「ひきこもり系」と「じぶん探し系」の主たる区分は、「コミュニケーション能力」と「自己イメージ」の相違によるものであることに特徴がある。

2.2. 「若者たちの二極分化B」(正高)

正高(2003:13-16)によれば、現代の若者たちは次の表(3)に示すように、「ひきこもり系」と「ルーズソックス系」を両極として、二極分化が起きているという。

(3) 「ひきこもり系」と「ルーズソックス系」

	【ひきこもり系】	【ルーズソックス系】
[共通点]	家のなか主義	
[相違点]	「家のなか」の範囲 <input type="checkbox"/> 小	「家のなか」の範囲 <input type="checkbox"/> 大

「ひきこもり系」とは、典型的には、自分の部屋に鍵をかけて閉じこもり、外界と一切の交渉を絶っている若者たちである。「ひきこもり」の若者は、家族に食事を自室の前まで持ってこさせて、独りで取ることも珍しくない。家族との会話はメモによることもある。また、昼夜の生活リズムが逆転していることが多い。彼らは昼間に寝て夕方に起きだす。そして、テレビを見たりコンピュータゲームに興じたりして時間を過ごす。他方、「ルーズソックス系」とは、たとえば、ルーズソックスをはいたり、靴のかかとを踏みつぶしたり、地べたに平気で座ったり、歩きながら飲食をする若者たちのことである。そのような若者たちは、ファーストフードショップへ行っても、周囲のお客の迷惑を顧みず、自分と仲間たちだけで大騒ぎして楽しむことができる。

この「ひきこもり系」と「ルーズソックス系」の両者には、「家のなか主義」とでも表現すべきスタイルが共通しているという。それは、私的空間である「家のなか」から公共の場に出ることの拒絶を意味する。この両者が異なるのは、その「家のなか」の範囲である。つまり、その相違点は、どれだけの広さを自分が活動する領域として設定しているのかによる。「ひきこもり系」のもっとも極端な場合は自宅の自室のみを「家のなか」と定義して、その領域の外へ出ることを拒む。親であっても、その私的領域からは排除される。「ルーズソックス系」は、それとは正反対に、公的空間においても、「ひきこもり系」の自室のような感覚でいられる。つまり、それは、「家のなか」という私的空間を公的空間にまで持ち出していると理解することができる。このように、「ひきこもり系」と「ルーズソックス系」の両者は、その自己定義した私的領域の範囲においては異なるが、そこから外へ足を踏みだそうとしない点においては一致していることになる。この「若者たちの二極分化B」(正高)における「ひきこもり系」と「ルーズソックス系」の区分は、「家のなか主義」という私的領域の範囲の相違によるものであることに特徴がある。

以上、「若者たちの二極分化A」(斎藤)と「若者たちの二極分化B」(正高)について概説した。この両者の一方の極は、それぞれ「じぶん探し系」と「ルーズソックス系」であり、その点においては異なる。しかし、もう一方の極においては「ひきこもり系」ということで一致していることが分かる。次に、筆者自身が考える「若者たちの二極分化C」(洞澤)について述べる。

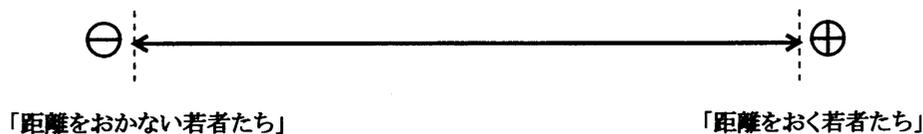
2.3. 「若者たちの二極分化C」(洞澤)

人間は、通常、他者についての認知に基づいて、その人物に対する自己の接し方を決定する。本稿では対人コミュニケーションにおいて見られる諸現象の深層には、他者に対する何らかの心的距離が常に存在しているという前提に立つ。これは、対人認知に基づいて形成される

心理的距離感のことである。それは、より具体的には、たとえば、他者に対して親しみが感じられる／感じられない、好感を持てる／持てない、関心がある／ないなど、何らかの所感となる。または、それは他者に対して抱く畏敬、緊張、恐怖など、何らかの感情となることもある。人間は他者を認知すると、心の中には他者に対して何らかの概念としての距離感が生まれる。本稿では、それを心的距離と呼ぶことにする。

他者に対するこのような心的距離を基準にすると、現代の若者たちは「距離をおく若者たち」を一方の極、「距離をおかない若者たち」を他方の極として大きく二極分化してきていると考えられる。「距離をおかない若者たち」とは、他者を過小に認知するために、他者に対して心的距離を置かない、または、心的距離を置かなすぎる若者たちのことである。「距離をおく若者たち」とは、それとは対照的に、他者を過大に認知するために、他者に対して心的距離を置く、または、心的距離を置きすぎる若者たちのことである。他者に対する心的距離の有無とその程度をプラス(+)、マイナス(-)の記号によって表すことにすると、若者たちの二極分化は、次の(4)のような心的距離のスケールによってイメージ化して示すことができる。

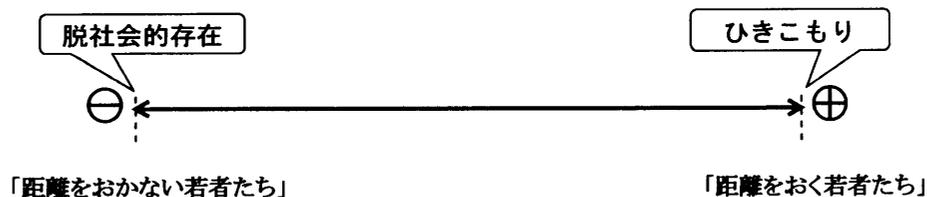
(4) 心的距離のスケール



次に、この心的距離の両極を規定することにする。そのために、両極において見られる「極地現象」について考える。「極地現象」とは、極地において見られる極限的な現象のことである。「距離をおかない若者たち」において見られる「極地現象」は「脱社会的存在」である。他方、「距離をおく若者たち」において見られる「極地現象」は「ひきこもり」と考えられる。

心的距離のスケール(4)に「極地現象」を加筆すると、次のイメージ図(5)のように表すことができる。若者たちにおいて見られる「極地現象」は、日本社会における若者たちという大きな一つの年代層の「極地現象」でもある。

(5) 「極地現象」



次に、「脱社会的存在」と「ひきこもり」について概説する。「脱社会的存在」とは、端的に言えば、他者とのコミュニケーションが不全に終わり、自己の尊厳が失われた結果、未熟な自尊心を守るために社会から積極的に離脱しようとする若者たちのことである(宮台2001)。彼らは不可解な動機から容易に人の命を奪うような凶暴な犯罪を犯すことがある。当時11歳の男児の命を残酷に奪った酒鬼薔薇聖斗の事件(1997)は、その典型であると言われる。通常、人間は他者とのコミュニケーションを通じて、健全な自尊心を形成することによって社会生活を営むようになる。しかし、他者との交流がなくても十分に生活できる環境があるために、それが十分に達成されないことが起こる。その場合、きわめて重大な戦略転換が行われる。それは、コミュニケーションの中で尊厳を維持することをやめて、自分の尊厳をコミュニケーションとは無関連なものにすることである(宮台2001:10-11)。つまり、そうした若者たちは、他者との社会的交流における試行錯誤で自尊心を形成するという経路に重大な故障が生じて、他者の存在と全く無関係に自らの尊厳を維持できるようになる(宮台/香山2001:15)。その結果として、「脱社会的存在」の若者たち

は、人とモノの区別がつかなくなり、人を殺すことの敷居が極めて低くなる(官台2001:14)。「脱社会的存在」は、他者の命を容易に奪えるという意味において、他者に対して心的距離を置かなすぎるのである。それは、「距離をおかない若者たち」の"極地現象"であると考えられることができる。なお、こうした若者たちの人数は推定することすら困難であり、まったく不明である。

「ひきこもり」とは、人とかかわることを求められる場面から逃避しようとする傾向であると言われる(塩倉1999:19)。それは病気ではなく、たとえば、次の(6)のように定義されるような一つの状態を意味する。

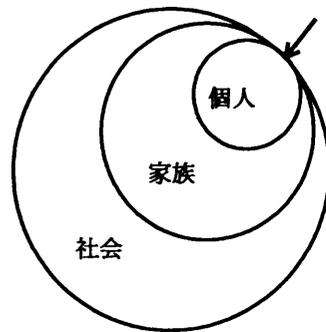
(6) 「ひきこもり」の定義 (斎藤2002:22)

- (a) (自宅にひきこもって)社会参加をしない状態が6ヶ月以上持続しており、
- (b) 精神障害がその第一の原因とは考えにくいもの

つまり、「ひきこもり」とは、6ヶ月以上自宅にひきこもって、会社や学校に行かず、家族以外の他者との親密な対人コミュニケーションがない状態であり、統合失調症、うつ病、自閉症などの精神障害または脳機能障害が第一の原因とは考えにくいものを指す。「ひきこもり」は、男性に多く、推定で120～160万人いるとも言われている。「ひきこもり」においては、社会との接点が失われている。このことは、次の(7)「ひきこもりシステム模式図」(斎藤2003:79-84)による説明がとて分かりやすい。なお、次のイメージ図は筆者により一部簡略化および補足をしてある。

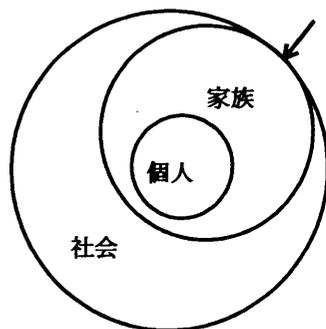
(7) ひきこもりシステム模式図 (斎藤2003a:79)

[A] 健常なシステム

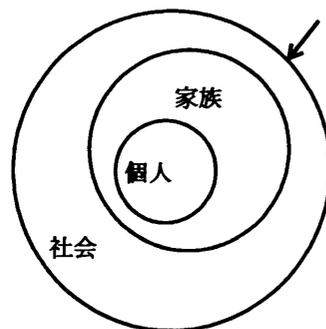


[B] ひきこもりのシステム

(a)



(b)



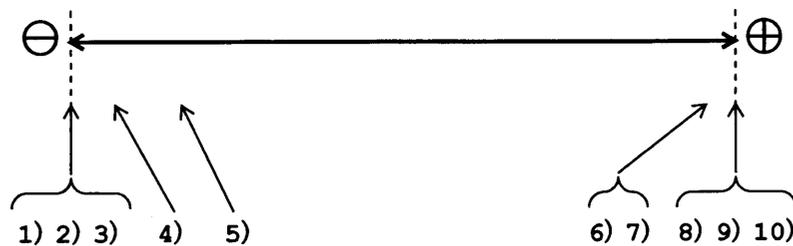
(7)[A]「健常なシステム」においては、個人は家族および社会と接点(コミュニケーション)を持ち、お互いに影響を及ぼし合いながら作動している。通常、この接点は完全には失われることはない。しかし、(7)[B]「ひきこもりのシステム」においては、このような接点が乖離して機能しなく

なり、悪循環が起こる。まず、(7)[B](a)のように個人が家族および社会との接点を失う。それが長期化すると、家族の中に不安や焦燥感が高まる。本人への叱咤激励は新しいストレスとプレッシャーを生むことになる。さらに、状態が悪化すると、家族は世間体を気にするようになり、(7)[B](b)のように家族が「ひきこもり」の個人を内に抱えたまま社会との接点を失うことにもなる。こうなると、「ひきこもり」は家族とともに社会の中に埋没してしまい、非常に大きな問題のある事態となる。「ひきこもり」になる原因としては、自分の容姿・能力へのコンプレックス、職場での人間関係、受験や就職の失敗、家庭内の問題・不和、学校での「いじめ」などがあるという。また、「ひきこもり」は、その数と質の点から日本独自の現象であるという指摘もある(斎藤2002:51-54)。「ひきこもり」は、他者との親密な対人関係がないという意味において、他者に対して心的距離を置きすぎるのであり、「距離をおく若者たち」の「極地現象」とであると考えることができる。

以上、「距離をおかない若者たち」および「距離をおく若者たち」の「極地現象」をそれぞれ「脱社会的存在」、「ひきこもり」と規定して、それらについて説明した。この「若者たちの二極分化C」(洞澤)における「距離をおかない若者たち」と「距離をおく若者たち」の区分は、他者に対する心的距離を基準にすることに大きな特徴がある。

次に、先に示した心的距離のスケール上において、それらの「極地現象」とともに、他者に対する心的距離がよく現れていると考えられる現象をいくつかあげてみることにする。それらは、次の(8)の心的距離のスケール上において示す。なお、心的距離のスケール(8)上に示した1)~10)の番号は、以下にあげる各事例の番号と一致する。ただし、心的距離のスケール上に矢印で示したその位置は、他の現象との相対的位置関係を表すものであり、決して厳密なものではない。

(8) 心的距離が現れている現象例



- | | | |
|-------------------------|---|----------------------|
| 1) 「愛知主婦殺害事件」(000501) | } | 「脱社会的存在」の例
【極地現象】 |
| 2) 「佐賀バスジャック事件」(000503) | | |
| 3) 「ハンマー殴打事件」(050421) | | |
| 4) 「ストーカー」 | | |
| 5) 「傍若無人の若者たち」 | | |
| 6) 「ニートの少年①」 | | |
| 7) 「ニートの少年②」 | | |
| 8) 「ひきこもりの少女①」 | } | 「ひきこもり」の例
【極地現象】 |
| 9) 「ひきこもりの少年②」 | | |
| 10) 「ひきこもりの少年③」 | | |

次に、1)~10)の事例について、簡単に説明する。▼1)「愛知主婦殺害事件」(000501)は、高校3年の男子生徒が65歳の主婦を40回以上ナイフで刺して殺害したという事件である。その動機は、「人を殺す経験がしたかった」というものであった。▼2)「佐賀バスジャック事件」(000503)は、17歳の少年が定期高速バスを乗っ取り、乗客の女性を殺害した事件である。この少年は酒鬼薔薇聖斗の事件(970524)および上記1)の事件にも触発されたという。▼3)「ハンマー殴打事件」(050421)は、大阪府東大阪市の公園で5歳の男児が17歳の少年にハンマーで殴られ重傷を負った事件である。少年には「大量殺戮したかった」という殺人願望があったとい

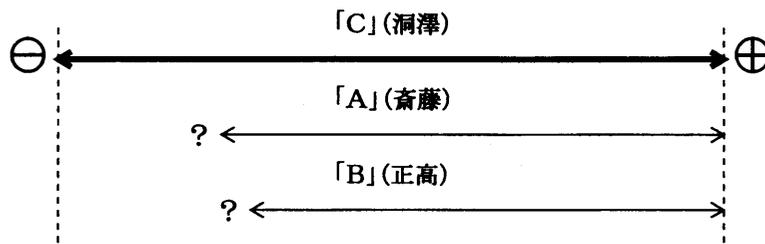
う。これら1)~3)は、「脱社会的存在」の例である。これらは他者に対して距離を置かなすぎる場合の"極地現象"であり、心的距離のスケール上の最も左端であるマイナス<->の極に位置する。▼4)「ストーカー」も他者に対して距離を置いていない例と言える。たとえば、以前交際していた女性にストーカー行為を繰り返すある一人の男性がいる。この男性は「相手を殺す」と歪んだ感情を爆発させた(TV朝日【スーパー】チャンネル)《ナゼダス調査隊》「緊急特集！"ストーカー"被害の実態」(051110)より。▼5)「傍若無人の若者たち」とは、社会的迷惑行為を行うような例である。たとえば、栃木県内で喧嘩騒ぎを起こした十数人の少年たちが電車内で他の乗客たちの迷惑を顧みずに大騒ぎをする。複数の警官が大宮駅から赤羽駅まで少年たちに同行する。「他にお客さんがいるが迷惑だと思わないのか？」という警官の質問に「関係ないよ、そんなの！」「全然迷惑だと思わない」「若いから静かにできないの！」などと言って叫び、騒ぎ続けた(日本TV【NNNきょうの出来事】「急増する車内暴力の実態」(010710)より)。これら4)、5)は、「極地現象」ではないが、他者に対して大きな迷惑をかけているという意味において、心的距離のスケール上では、相対的にマイナス<->側に位置するものであり「距離をおかない若者たち」の部類に入れることができる。▼6)「ニートの少年①」におけるニートとは、若年無業者のことである。現在、その数は85万人いるとも言われているニートは、2020年には160万人に迫ると予測されている。それは無業者という名の通り、学校にも行かない、仕事もしていない、そして職業訓練もしていないという若者たちである(Not in Education, Employment or Training)。たとえば、長男がニートであるというある家庭の朝の食卓にその長男の姿はない。家族が出勤したあと、独りで朝食を取り、あとは自室でゲームをして過ごすという日々を送っている(TV東京【ガイアの夜明け】「くNo.159」ボクたちが働かない理由」(050503)より)。▼7)「ニートの少年②」、これもニートである若者たちの例である。ニートなどの若者を社会復帰させるNPO法人で暮らす若者たちにレポーターが「将来の目標はある？」「何かやりたい夢はありますか？」という質問をする。それに対し、「それがないんですねー」「ないです」「わからない」「何も考えていない」というような答えが返ってくる(日本TV【NNNドキュメント】「ニート～働けない若者の憂うつ～」(050314)より)。以上、ニートの若者たちは、「極地現象」としての「ひきこもり」ほどではないが、他者に対して心的距離を置いており、心的距離のスケール上では相対的にプラス<+>側に位置する。それは「距離をおく若者たち」の部類に入れることができる。次にあげる8)~10)は「ひきこもり」の例である。それは、「距離をおく若者たち」の"極地現象"として心的距離のスケール上の最も右端であるプラス<+>の極に位置する。▼8)「ひきこもりの少女①」は、中学3年になる女子生徒である。彼女は、いじめが原因で1年生のときから自室にひきこもりがちであり、高校に進学したいという思いから再び中学に通い始めたが、再び「ひきこもり」になってしまったという(フジTV【とくダネ！】《とくダネ！ 特捜部》「熱血女性カウンセラー不登校、引きこもり...密着！スパルタ体当たり」(001221)より)。▼9)「ひきこもりの少年②」は、14歳の少年の例である。締め切ったカーテンのために昼間でも薄暗い部屋は、暴力によって壁に穴が空いており、ゴミが山のように散乱している。そして、異臭が鼻を突く。彼は小学校6年の3学期から1年半この部屋にひきこもっている。▼10)「ひきこもりの少年③」は、19歳の少年の例である。高校卒業の直後からひきこもり、すでに3カ月が経過している。親子の対話はまったくない。自室でゲームなどをして日々を過ごしている。母親は、この3カ月毎日食事を部屋まで運んでいる(9)、10)ともに日本TV【スーパーテレビ】「"ひきこもり"を救え！待たなし！親子の壮絶な闘い」(050801)より。

以上、心的距離のスケール(8)上において、両極の"極地現象"とともに、他者に対する心的距離がよく現れていると考えられる事例をいくつか取り上げて説明を行った。このように、若者たちの対人関係または対人コミュニケーションにおいて見られるいくつかの現象は、他者に対する心的距離のスケール上に位置づけることができる。

これまで、この2.では「若者たちの二極分化」について、3つの考え方について説明してきた。それらは、「若者たちの二極分化A」(斎藤)、「若者たちの二極分化B」(正高)および「若者たちの二極分化C」(洞澤)の3つである。次に、この三者を比べてみることにする。このABCの三者は、いずれも「ひきこもり」を一方の極とすることにおいては完全に一致している。しかし、もう一方の極においては、A「じぶん探し系」(斎藤)、B「ルーズソックス系」(正高)およびC「距離を

おかない若者たち」(洞澤)のように、その考え方を異にしている。Aの「ひきこもり系」と「じぶん探し系」の主たる区分は、「コミュニケーション能力」と「自己イメージ」によるものである。他方、Bの「ひきこもり系」と「ルーズソックス系」の区分は、「家のなか主義」という私的領域の範囲によるものである。そして、Cの「距離をおく若者たち」と「距離をおかない若者たち」の区分は、他者に対する心的距離によるものである。若者たちの対人コミュニケーションにおける多様な現象を説明するためには、Cによる捉え方がその包括範囲が広いために、一番有効であると考えられる。三者の相違は、たとえば、次の(9)のようにイメージ化して示すことができる。

(9) 若者たちの二極分化

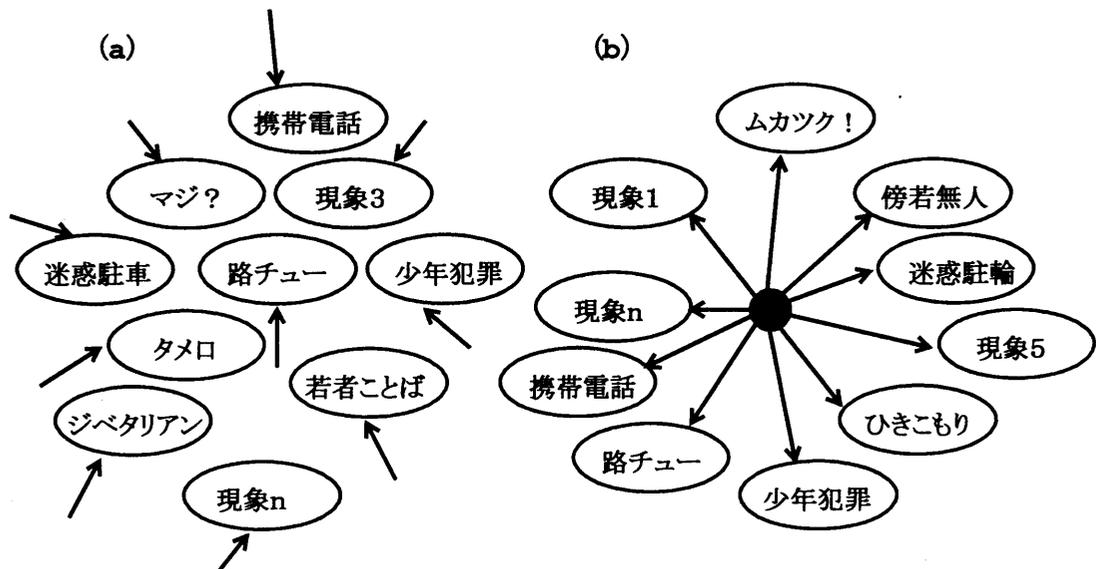


「若者たちの二極分化C」(洞澤)の捉え方の有効性は、若者たちの対人コミュニケーションにおいて見られるその他の現象の考察を通して確かめることができる。このことについては、次節3.および4.において示す。

3. 若者たちの二極分化と《他者不在》という心性

拙論(2000)では、現代の若者たちの対人コミュニケーションに見られるいくつもの気になる現象を取り上げて、個別的な現象の背景を一元的に説明できる可能性を示した。そこにおいて取り上げた問題を、改めて問題提起し直すと、次のようになる。若者たちの対人コミュニケーションにおいて見られる気になる現象として、たとえば、若者ことば、携帯電話による通信、路上駐車などの社会的迷惑行為、「ジベタリアン」(地べたに座る若者)、少年犯罪、対人関係の悩み事の増加などがある。①これらの現象は次の(10)(a)のように、一つ一つが個別的に発現しているのか、それとも、(10)(b)のように何か中心となる核●があって、そこから一元的に発現しているのか。そして、②もし、諸現象が(10)(b)のような発現の仕方をしていたとしたら、その中心の核となる●は、何であるのか。

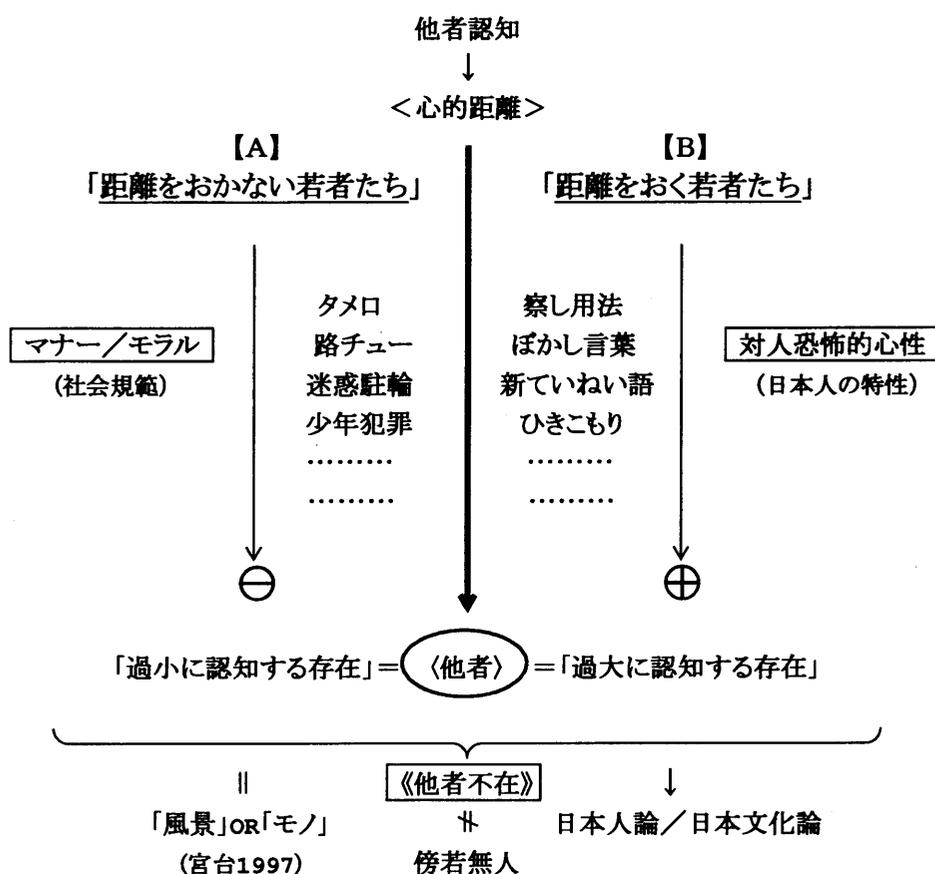
(10) 諸現象の発現の仕方



拙論(2000)では、このような①②の2つの問題について考察を行い、次のような結論を得た。若者たちの対人コミュニケーションに見られる諸現象は(10)(b)のような発現の仕方をしており、その中心となる核●は、《他者不在》という若者たちの心性であることを述べた。また、なぜ諸現象が(10)(b)のような発現の仕方になるのか、その背景についても考察した。《他者不在》の心性とは、端的に言えば、若者たちに見られるある種の自己中心性であり、他者に対する想像力が欠如している状態のことである。つまり、それは他者の存在を適切に認知することができないために、結果として、他者に対して適切なコミュニケーション上の心的距離をとることができないことを意味する。次に、一部、2.3.と重なることになるが、この《他者不在》という若者たちの心性と「若者たちの二極分化C」との関係について説明する。

「若者たちの二極分化C」と《他者不在》との関係は、次の(11)のようにイメージ化して示すことができる。若者たちの対人コミュニケーションの在り方は、他者に対する心的距離を基準にした場合、2つの方向に二極分化してきていることはすでに述べた。一方は、他者に対する心的距離がマイナス<->の方向になる【A】「距離をおかない若者たち」である。もう一方は、他者に対する心的距離がプラス<+>の方向になる【B】「距離をおく若者たち」である。次の図(11)は、これら【A】と【B】のそれぞれおける他者の捉え方、関係すると思われる現象および事項を書き入れて表したものである。以下、この図(11)について説明する。

(11) 「若者たちの二極分化」と《他者不在》



まず、他者を認知すると、その他者に対して何らかの心的距離が生まれる。【A】「距離をおかない若者たち」にとって、他者は過小に認知する存在であり、心的距離としてマイナス<->方向の距離をとる。つまり、それは他者に対して距離を置かない、または、距離を置かなすぎることになる。他者は、「風景」または「モノ」とも言ってもよい存在となる(宮台1997)。分かりやすく表現すれば、相手の存在をあまり意識しない、または、まったく意識することはないのである。それ

は、他者の存在感が希薄になると言ってもよい。そのため、公共の場においても傍若無人な振る舞いをするのが可能となる。このような「距離をおかない若者たち」に見られる現象として、たとえば、「タメロ」、「路チュー」(路上キス)、迷惑駐輪、「ジベタリアン」(路上に座り込みたむろする若者たち)、少年犯罪などがある。「極地現象」として先に述べた「脱社会的存在」がある。これらは、マナー／モラルに関係する行為であり、社会規範からの逸脱が問題となる。他者に対して距離を置かないことから発せられる「タメロ」の問題については、具体的な言語行動としてあとで改めて言及する。迷惑駐輪、「ジベタリアン」については、拙論(2000)において取り上げた。ここでは、とても分かりやすい例として、「路チュー」について説明することにする。それは、公共の場で周囲の人の目を気にすることなく、若い恋人同士がイチャイチャしたり、キスをしたりする行為の総称でもある。次の(12)は、「路チュー」をしている若者のカップルをレポーターが近づいて突然インタビューするというあるテレビ番組の一場面である。

(12) 「路チュー」のカップルへのインタビュー

レポ: 「あっ、あの一、お取り込み中、おそれ入ります。(a)この状況で...

人目は...気になりませんか?

A男: 「(b)気に...する」

レポ: 「えっ、気にする?」

A男: 「(c)そう言われると、気にする」

レポ: 「アッ、言われると、気にする」

A男: 「うん」

レポ: 「えっ、(d)じゃ、言われるまでは...もう、まわりの様子は気にならない?忘れちゃった?」

A子: 「(e)うん、だって、みんな見ないじゃん、誰も...」

(991116 フジTV【とくダネ!】《とくダネ! 特捜部》「これが若者文化?」

"アツアツ"なのに"無言"...不思議デートの真相)より)

この(12)(a)「人目は気になりませんか?」、(d)「まわりの様子は気にならない?忘れちゃった?」というレポーターの質問に対して、次のような答えが返ってくる。(b)「気に... (すると言えば)...気にする」、(c)「そう言われると、気にする」または(e)「うん、(気にしない)、だって、みんな見ないじゃん、誰も...」というような答えである。このことから、この若者たちはレポーターから質問されるまでは周囲にいる他者の存在をまったく認知していなかったことが分かる。このような若者たちにとって周囲の人は「風景」または「モノ」同然となっている。つまり、この場合、他者は、山、川、田園などの風景またはテレビ、机、椅子といった物と同様な存在となっているのである。そのような「風景」または「モノ」に対しては、恥ずかしさを感じることはない。公共の場においても周囲の人のことが眼中にない、または、遠慮がないという意味において、他者に対して距離を置いていないと言える。

他方、【B】「距離をおく若者たち」にとって、他者は過大に認知する存在であり、心的距離としてプラス(+>方向の距離をとる。つまり、他者に対して距離を置く、または、距離を置きすぎることになる。分かりやすく表現すれば、相手の存在をとても意識する、または、過剰に意識しすぎるのである。このような「距離をおく若者たち」に見られる現象として、たとえば、「察し用法」「ぼかし言葉」「新しいねえ語」「ひきこもり」などがある。「ひきこもり」については、「距離をおく若者たち」において見られる「極地現象」としてすでに説明した。「新しいねえ語」とは、他者に対して過剰に心的距離を置くことから発せられる敬語表現であるが、このことについては、具体的な言語行動としてあとで改めて言及する。ここでは、「察し用法」と「ぼかし言葉」について説明することにする。

たとえば、次の(13)のように、友人Aから映画を見に行くことを誘われた場合の断り方について考えてみる。

- (13) A: 「今日、授業終わったら、映画とか行かない？」
B: 「ゴメン、ちょっと、今日は、都合が悪くて...」

C: 「ゴメン、今日は、約束があるから、あなたとは行かないよ」

このような場合、B: 「ゴメン、ちょっと、今日は、都合が悪くて...」のような断り方をするのが普通である。通常、仲良しの友達であれば、C: 「ゴメン、今日は、約束があるから、あなたとは行かないよ」という言い方をすることはない。このような断り方をすると、映画に誘ったAが傷つくかも知れない。たとえば、このBのような話し方が「察し用法」の例である。日本語には、話し相手の気持ちを損ねまいとして相手を気遣いながら話を進める話し方がある。このことによって、お互いの人間関係を良好に保つことができる。これが「察し用法」の一例である。

「ぼかし言葉」とは、たとえば、次の(14)~(17)の下線部のような表現のことである。

- (14) 「昨日のテレビとか見たー？」
(15) 「あいつ、ムカつくって感じ」
(16) 「マジ、むかつくみたいなー」
(17) 「オレ的にはかなりできていると思うんですけど」

これら(14)~(17)の表現は、物事の断定を避けて自分の主張を曖昧にしているという点において共通している。このことにおいて、「ぼかし言葉」は、「察し用法」と同様に、相手に対して距離を置く言語表現であると言える。

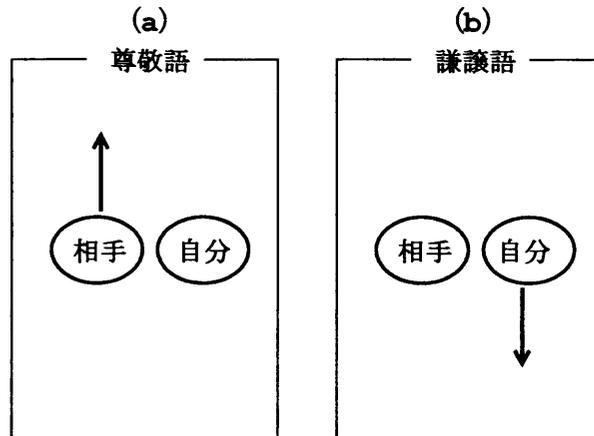
「察し用法」および「ぼかし言葉」は、共に日本社会における人間関係を配慮した表現方法であり、日本語のコミュニケーションの取り方としてとても特徴的である((本名1996)(佐々木1996)(木下1996)など)。このような話し方によって、自分の立場を守りながら相手とほどよい距離を保つことができる。それは、他者に対して距離をおくコミュニケーションであり、そこには自己を防衛すると同時に、他者に対する配慮がうかがえる。これは、若者たちに限定されたものではなく、日本人のコミュニケーションにおいてはごく普通に行われている。

このような日本人の曖昧なコミュニケーションの背景には、過剰な他者への配慮、すなわち対人恐怖的心が潜んでいるという指摘がある(中山1988)。それは他者に対して距離を置くことに他ならない。これは「ひきこもり」の心理とも共通してくる問題である。先にも触れたが、「ひきこもり」は、日本独自の現象であるという指摘もある(斎藤2002: 51-54)。他者への過剰な配慮によるコミュニケーション、すなわち、他者に対して距離を置くコミュニケーションについての研究は、とても興味深い日本人論・日本文化論になると考えられる。

以上、【A】「距離をおかない若者たち」と【B】「距離をおく若者たち」において見られるいくつかの現象および関係する事項について説明を行った。両者いずれの場合においても、他者に対して適切なコミュニケーション上の距離をとることができない場合が問題となる。他者を過小に認知しすぎる場合であっても、また逆に、他者を過大に認知しすぎる場合であっても、それは他者を適切に認知できないという意味において《他者不在》なのである。《他者不在》とは、このように他者に対して適切なコミュニケーション上の距離をとることができないという若者たちの心性なのである。「傍若無人」という言葉があるが、したがって、それは《他者不在》の概念とは異なることになる。それは、《他者不在》の概念の一部を説明することしかできない。

ここで、他者に対して距離を置くということに関係して、敬語の機能について考えてみる。丁寧語は、幾分、その趣を異にするが、尊敬語と謙譲語においては他者との距離が問題となる。尊敬語には、たとえば、「いらっしゃる」「ご覧になる」「おっしゃる」などがある。これらは、相手を上方向に高めることによって相手との距離を作り出す敬語である。謙譲語には、たとえば、「伺う」「拝見する」「申し上げる」などがある。これらは、自分を下方向に下げて相手との距離を作り出す敬語である。この両者の関係は、それぞれ次の(18)(a)(b)のようなイメージ図によって表すことができる。つまり、敬語の本来の機能は相手と距離を作り出すことにあると言える。

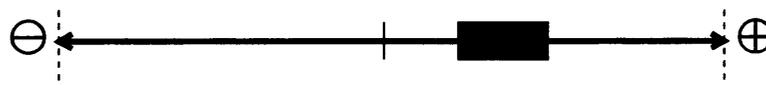
(18) 尊敬語と謙譲語



また、ポライトネス理論では、日本語は相手との距離を作り出すことによってコミュニケーションを円滑に進める「ネガティブ・ポライトネス」の言語であるとされる。すなわち、日本語では良好な人間関係を構築、保持していくためには、他者との距離を適切に認知して、相手に失礼にならないような言葉遣いをするのがとても重要なのである。

このような敬語、および、先に述べた「察し用法」「ぼかし言葉」の機能を踏まえた上で日本語の標準的なコミュニケーションスタイルについて考えてみる。敬語、「察し用法」、そして「ぼかし言葉」、これらはいずれも他者に対して距離を作り出す言語表現であると言える。つまり、そこには他者に対して距離を置くことによって、相手のことを配慮したり、良好な人間関係を保持しようとする意図がある。そのことを心的距離のスケール上において示してみる。すると、それは他者に対して距離を置くという意味において、次の(19)の黒く塗りつぶした■のような位置に表すことができる。それは心的距離のスケールの中心よりも相対的に右よりに位置することになる。これが日本語のコミュニケーションにおける標準的な心的距離の位置であると考えられる。

(19) 標準的な心的距離の位置 (日本人)



他方、アメリカ英語は「ポジティブ・ポライトネス」の現れやすい言語であると言われる。そこでは、他者との距離を小さくすることによって、円滑にコミュニケーションを進める方策が取られる。それには、たとえば、初対面の相手に対しても親し気に話しかけたり、会話の中でジョークを交えながら話すことなどが含まれる。このことを踏まえると、アメリカ英語の標準的なコミュニケーションにおける心的距離は、日本人の場合よりも相対的に左寄りになると考えられる。しかし、このような対照性についての結論は、対人コミュニケーションの国際比較のさらなる研究成果を待たなければならない。

4. 「親疎の意識」に基づく若者たちの言語行動

拙論(2004)では、敬語の使用を苦手とする現代の若者たちの言語行動の特徴とその背景について考察を行った。そこにおいて取り上げた若者たちの言語行動は、「タメロ」「敬語表現による拒絶」および「ハイ敬語」の3つである。分析の結果、これらの言語行動は「親疎の意識」を基軸とするほぼ一貫した言語行動であることを明らかにした。その結果は、次の(20)のイメージ図によって示すことができる。また、なぜ「親疎の意識」が若者たちの言語行動の基軸となるのか、その背景についても述べた。

これら(26)(27)における発話者は、相手が、本来、丁寧な言葉遣いをすべき対象であることが認識できていない。これは《他者不在》の心性から発せられる「タメ口」とは言える。つまり、他者に対して距離を置いていないのである。

敬語表現は、親しくはない相手を拒絶する場合にも多く用いられる。そのような事例として、たとえば、次の(28)～(31)の例がある。なお、ここでの敬語表現とは、狭い意味での敬語ではなく、丁寧な言葉遣い全般を表すものとする。

- (28) <大学の同じ学科の友達・M・18歳> (サークルの新歓コンパに行き2次会の誘いに対して)
「忙しいので帰らせてもらいます」(M, '86)
- (29) <アルバイトの勧誘員・F・20歳> (入学式の日アルバイトの勧誘をされて)
「すみません。私すでにバイト先決まっているので」(F, '86)
- (30) <路上アンケート・M・20代後半> (帰り際で、あまり関わりたくなかったから)
「すみません、急いでいるもので…」(F, '85)
- (31) <高校時代からの親しくはない友人・F・18歳> (相手の態度にむっとして)
「それで、何が言いたいんですか？」(F, '86)

これら(28)～(31)においては、相手を拒絶するという意味において、「親疎の意識」のうち相手に対する「疎の意識」から発せられている敬語表現であると考えられる。そこでは、敬語表現の距離を作り出すという機能が他者に対して用いられているのである。また、敬語表現は、次の(32)～(35)のように、相手が親しい間柄または恋人の場合であっても、その関係が一時的に不安定になったときに使われることがある。

- (32) <中学時代からの友達・M・20歳> (けんか別れた時)「もう帰ります」(F, '86)
- (33) <妹・M・14歳> (忙しい時に勉強のことで尋ねられて)
「今ちょっと忙しいので、あとにしてください」(F, '86)
- (34) <彼氏・M・25歳> (なかなか電話にでなかったので)
「何をしたらっしゃったんですか？」(F, '85)
- (35) <恋人・F・同年> (今一つ意見が合わないとき)「それはどういうことですか？」(M, '84)

この(32)～(35)の事例を考えてみた場合、「親疎の意識」とは決して固定化されたものではないと言える。つまり、同一の相手であっても状況によって、たとえば、「親の意識」から「疎の意識」へと移行することが分かる。

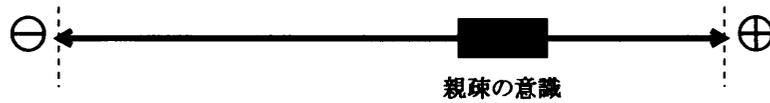
また、相手を拒絶する敬語表現には、「新しいねい語」と呼ばれるものがある(朝日960411)。次の(36)(37)は、そのような例である。

- (36) <大学の同級生から授業の資料を貸してくれとたのまれたような場面で>
「お約束のプリントです。お役に立てばうれしいです。ミスがあったら僕に指摘してください」(朝日960411)
- (37) <大学のゼミの仲間に対して>
「どちらから、通っていらっしゃるんですか」(同上)

そうした心理は、次の(38)(39)のようなものであるという。

- (38) 「期待がはずれて、無意味に傷つくくらいなら、初めから人と距離を置いて摩擦を避けるほうが心地いい」(同上)
- (39) 「敬語を使っておけば、本当の自分を出さずにすむ。ふだんの言葉で話したいけれど、失敗を繰り返すまいと思うと身構えてしまうんです」(同上)

(45) 「親疎の意識」の位置



また、相手および状況が異なれば、その他者に対する「親疎の意識」は、「親の意識」と「疎の意識」の間で移行することは自然なことである。また、先の(32)～(35)の事例から、同一人物に対しても状況によっては、たとえば、「親の意識」から「疎の意識」へと一時的に移行することが分かった。また、その逆となる場合も十分に考えることができる。このことは、次の(46)において示すように、「親疎の意識」においてもプラス<+>の局面とマイナス<->の極面があり、意識はその間において程度の差をもって相互に移行するものであると理解することができる。

(46) 心的距離の移行



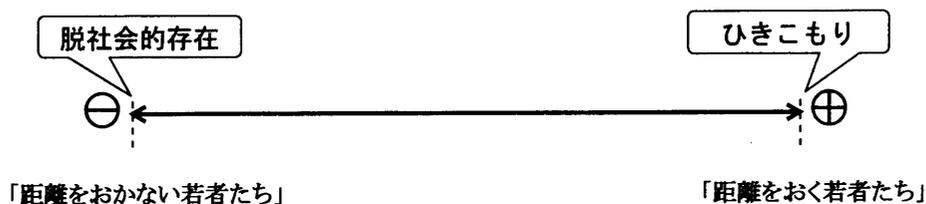
5. 結論

以上、本稿では現代の若者たちの対人コミュニケーションにおける二極分化について、次の(イ)(ロ)の2つの問題を提起して考察を行った。

- (イ) 若者たちの対人コミュニケーションにおける二極分化とはどのようなものであるのか。
- (ロ) その二極分化において、一般的な若者たちの言語行動は、どのように位置づけることができるのか。

問題(イ)については、他者に対する心的距離を観点とした考察によって、「距離をおかない若者たち」を一方の極(マイナス<->の極)、「距離をおく若者たち」をもう一方の極(プラス<+>の極)として、大きく二極分化が起きていることを明らかにした。そして、「距離をおかない若者たち」の「極地現象」は「脱社会的存在」であり、「距離をおく若者たち」の「極地現象」は「ひきこもり」であることを述べた。このことは、心的距離のスケールを用いて、次の(47)のように示すことができた。

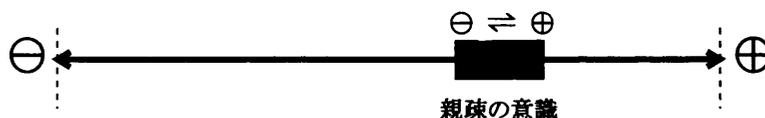
(47) 心的距離のスケール



問題(ロ)については、対人関係において見られるいくつかの現象とともに、限定的ではあったが一般的な若者たちの言語行動の基軸となっている「親疎の意識」を心的距離のスケール上に位置づけることができることを示した。また、「親疎の意識」においては、他者の認知の仕方および状況によって、「親の意識」(マイナス<->の局面)と「疎の意識」(プラス<+>の局面)の間で程度の差をもって意識が相互に移行することも述べた。これらのことは、次の(48)のように示すこ

とができた。

(48) 「親疎の意識」の位置と移行



今後、若者たちを取り巻く社会的環境の変化と共に、若者たちの対人コミュニケーションにおける二極分化の傾向は、ますます増大していくと考えられる。

[参考文献等]

- 朝日新聞社(1996)「傷つくのがこわい—「やさしさ」世代の若者たち(6)」(朝日新聞・東京朝刊 960411)
- 宇佐美まゆみ(2002)「「ポライトネス」という概念」『月刊言語』(2002/1) 大修館書店
- 木下 是雄(1996)『日本人の言語環境を考える』木下是雄集3 晶文社
- 斎藤 環(2001)『若者のすべて』PHPエディターズ・グループ
- 斎藤 環(2002)『「ひきこもり」救出マニュアル』PHP研究所
- 斎藤 環(2003a)『ひきこもり文化論』紀伊國屋書店
- 斎藤 環(2003b)『若者の心のSOS』日本放送出版協会
- 佐々木瑞枝(1996)「比較規準としての言語の問題」濱口恵俊(編著)『日本文化は異質か』日本放送出版協会
- 塩倉 裕(1999)『引きこもる若者たち』ビレッジセンター出版局
- 塩倉 裕(2000)『引きこもり』ビレッジセンター出版局
- 柴田 武(2004)『ホンモノの敬語』角川書店
- 内閣府政策統括官(2004)「若者の包括的な自立支援方策に関する検討会について」(第3回検討会<平成16年10月19日>議事録要旨)
<http://www8.cao.go.jp/youth/suisin/jiritu/index-j.html>
- 中山 治(1988)『「ぼかし」の心理』創元社
- 橋本 治(2005)『ちゃんと話すための敬語の本』筑摩書房
- 洞澤 伸(2000)「若者たちのコミュニケーションに見られる他者の不在」末永豊/津田雅夫(編)『文化と風土の諸相』文理閣
- 洞澤 伸(2004)「「親疎の意識」を基軸とする若者たちの言語行動」稲生勝/津田雅夫/林正子/洞澤伸(共著)『文化的近代を問う』文理閣
- 本名 信行(1996)「日本人と話しことば意識」『放送研究と調査』(1996/12) 日本放送出版協会
- 正高 信男(2002)「日本語の「乱れ」とルーズソックス」『文藝春秋』(2002/9臨時増刊号)
- 正高 信男(2002)「「家の中」意識の拡張」【アクセスポイント】(読売新聞・東京夕刊020628)
- 正高 信男(2003)『ケータイを持ったサル』中央公論新社
- 宮台 真司(1997)『世紀末の作法』株式会社リクルート ダ・ヴィンチ編集部
- 宮台 真司(2001)『「脱社会化」と少年犯罪』創出版
- 宮台真司/香山リカ(2001)『少年たちはなぜ人を殺すのか』創出版